

介護実習におけるルーブリック評価導入後の現状と課題

－実習の効果的な学びを目指して－

The Possibilities for the Introduction of Rubric Evaluation and the Issues for its Establishment in Care-work Practicum: Based on the Interviews with the Care-work Practicum Instructors

福 田 洋 子

Yoko Fukuda

(要 約)

本稿では、高田短期大学高等研究会が開発したルーブリック評価表を介護実習で使用し、実習評価としてのルーブリックが学生の効果的な学びに繋がる一つ的手段としてなり得るのかどうか、現状と課題を検討するために、実習施設指導者と実習 I を終えた学生にインタビュー調査を実施した。結果、実習指導者からは、ルーブリックが実習評価として学生の動きの可視化に繋がり、評価の視点がぶれることなく評価でき、学生のできないところへの指導を強化できるとの、また学生からは、実習前にルーブリックの項目を見ておくことで、目指すべき視点が明確になり、効果的な実践活動に繋がったとの報告があった。一方、自己評価には、自己に対する普段の考え方や自己肯定感などが関係して評価の異差が現れることが明らかになったことを報告する。

(キーワード)

介護実習、ルーブリック、評価の質の向上、効果的な学び

1. はじめに

2017年にとりまとめられた福祉人材確保専門委員会の報告書¹(以下、報告書)では、求められる介護福祉士を養成する観点から教育内容の見直しが行われた。その中で、介護実習では、「実習施設と、介護実習の目的やねらいの共有を図ることや、実習指導の質の向上を目指した取り組みが必要」との報告があった。しかしながら、報告書での、実習指導者に対する介護福祉士の養成カリキュラム改正に関する調査においては、実習指導者の9割が、介護福祉士養成のカリキュラムが新しくなることを知らないと答えていた。このことから、実習指導者のフォローアップ研修において実習内容の理解や到達目標の周知と共に新カリキュラム対応の指導をする必要性が述べられている。

介護福祉士養成教育においては、2019年4月から新カリキュラムとなり、超高齢社会を担う介護福祉人材育成に留学生を加味した、質の高い介護福祉士養成教育が進められている。特に介護実習においては、介護記録はもとより、根拠を踏まえて利用者それぞれに合った介護実践ができることも挙げられている。しかし、介護実習での目標達成は、経験の浅い学生にとりハードルが高いものでもある。しかも、実習後に実習評価があることから、どこまで実習目標に到達できるかも学生の課題となる。

介護実習における実習評価は、介護技術のみならず、実習態度、コミュニケーション能力、自己目標、施設理解と多岐にわたって評価されることから、実践における課題は高いハードルを越えなければならないことになる。そこで、高田短期大学介護福祉コース(以下、介護福祉コース)では、介護実習の実践から何ができて、何ができないのかを明確にし、学生達が日々課題に取り組み、目標達成に向かえる

よう、2018年より評価方法としてルーブリックを導入した。

ルーブリックとは、「ある課題をいくつかの構成素に分け、その要素ごとに評価基準を満たすレベルについて詳細に説明したものである²。」ことから従来の評価方法より実習活動の質の向上に有効に働くと考えた。つまり、評価と育成は表裏一体のものであることから、学生が実習で実践した動きを振り返り、次の実習に向けて今より質の高いパフォーマンスが発揮できるようになり、目標達成に繋がると考えた。

介護福祉士養成教育においては、2年間で480時間の介護実習が義務付けられており、介護福祉教育の中で、大きなウエイトを占めている。学生にとって介護実習での学びは自身の介護の質を高め、自己の成長を促す場として大きな位置を占めるのである。ゆえに、介護実習におけるわかりやすい評価方法は、今後の目標を明確にするためにも重要となる。にもかかわらず、これまで三重県介護福祉士養成施設協議会が作成した「三重県版介護実習・実習ノート」（以下、実習ノート）の実習評価表において、その評価項目と実践での動きの可視化を目指す評価方法が検討されてこなかった。

そこで、介護福祉コースで、介護実習における実習評価ルーブリックの活用を検討し、実際に実習評価として活用した。本研究では、これまでの検討課題を基に、ルーブリックの活用が、新規実習施設の実習指導者と1年生の学生にとりどのような効果があったか現状と課題を明らかにする。

2. ルーブリック導入の流れ

介護福祉士取得のための介護実習は、実習ⅠとⅡに2区分されている。実習施設Ⅰ（実習Ⅰを行う施設、以下同様）は、利用者の生活の場である多様な介護現場において、利用者の理解を中心とし、これに併せて利用者・家族との関りを通じたコミュニケーションの実践、多職種協働の実践、介護技術の確認等を行うことに重点をおいた実習施設である。実習Ⅱを行う施設は、1つの施設・事業等において一定期間以上継続して実習を行う中で、利用者ごとの介護計画の作成、実施後の評価やこれを踏まえた計画の修正といった一連の介護過程のすべてを継続的に実践することに重点をおいた実習施設である³。介護福祉コースでは、実習Ⅰは、90時間、実習Ⅱを実習Ⅱと実習Ⅲに2分類し、各180時間の実習を実施している。

実習終了後には、実習指導者より各学生の実習評価を受けることになる。実習評価表は、2018年にルーブリック評価を導入するまで、実習ノートに掲載されている実習Ⅰ・Ⅱの評価表を基本に介護福祉コースで改良したものを使用していた。しかし、当時、教育界においては、ルーブリックが学生の成長に良い効果を得ているとの報告⁴が多々あり、学生の成長が見えにくい実習評価表のあり方に疑問を抱き、2016年より高田短期大学高等教育研究会（以下、高等教育研究会）⁵で実習ノートの評価指標を基にルーブリックの評価項目の内容を検討し2018年より導入した。

ルーブリック評価導入までの評価では、評価指標が1つの評価項目の中にいくつもの評価指標があり、どれができて、どれができないのかがはっきりしなかった。そのため評価点が5段階中の3以下についてくると学生が評価点に疑問を抱き、「一生懸命にしたのになぜ3なのか」と聞きに来ることがあった。そこで、学生の行動特性と、実習指導者から聞き取っていた実習での様子を学生に伝え説明していたが、

学生が納得のいく、より分かりやすく明確な評価方法は何かを模索していた。

実習評価においては、評価指標はあるものの、評価者も人であることから、評価をする際に、人の行動特性、つまりその人となりの人間特性が加味され、見えないところで評価に関わってくることがある。ゆえに、現行の評価表に変えてルーブリック評価表を取り入れ、評価基準の差異をできるだけ少なくすることを考えた。それは、学生の実習評価点の根拠が見える化し、学生が納得のいく実習評価とするためである。

学生にルーブリックを提示することにより、成績評価の公明性が增大するとともに、到達目標の達成度を通して授業改善の基礎資料を得ることもできる⁶としているように、教員、実習指導者、学生が到達目標の共有と達成状況を確認し、より質の高い授業に還元していくことは重要である。高等教育研究会においては、実習評価のルーブリックを、2016年から研究し学生の実習における実践能力を検証してきた。本研究では、新規実習施設の実習指導者と1年生で初めてルーブリック評価表を使用し自己評価を実施した学生へのインタビュー調査の結果を報告する。

3. 研究概要

3.1 研究目的

本研究の目的は次の2点である。

目的1. 実習指導者に対し、実習ルーブリック評価の項目の妥当性の是非と項目内容の精査及び、今後、実習評価としてルーブリック評価表導入についての意見を聴取する。また実習指導者の評価視点と学生の評価視点で逆相関のあった項目についての妥当性の確認をすることを目的とする。

目的2. 1年生の学生に対し、実習Ⅰにおけるルーブリック評価項目のわかりやすさ、わかりにくさについての意見と、実習評価と自己評価についての異差を聴取し、評価項目の内容の改善に活かすことを目的とする。

3.2 調査方法

(1) 調査期間

2021年7月～11月

(2) 対象

- ・実習施設Ⅱの特別養護老人ホームの実習指導者3人、介護老人保健施設の実習指導者1名（目的1）
- ・1年生の学生 日本人5名（目的2）

(3) 調査方法

対象者に口頭で調査内容を説明し、インタビュー調査を実施した。インタビュー調査は個別的に実施し、対象者の許可を得て内容を録音し対象者の発語をデータとした。

3.3 調査内容

実習指導者に対し、学生の実習評価としてルーブリック評価を実施して、学生の実習活動に合わない評価項目はないかの確認と共に、2019年実習Ⅲ⁷で学生の自己評価と実習指導者の評価に逆相関のあった「個別性に応じた介助の必要性を理解して実施できる」、「介護実習を通して、利用者の望む生活が理

解できる」についてどのようにとらえているか等調査した。

さらに、2021（令和2）年度に調査⁸した際、実習指導者のルーブリックに対する改善意見として「重度とは、寝たきりの人なのか、認知症の人なのか、どちらでもよいのか迷う」との意見に対しても、重度の表現をどうするか、わかりやすい表現があるのか再度調査した。また、ルーブリックを実習評価として取り入れた場合、負担であるか否か、今後、実習評価としてルーブリック評価表を導入するための課題は何か、評価表全体について実習指導者がどのように考えているかを調査した。

1年生の学生に対し、?ルーブリック自己評価の際に、わかりにくい表現や評価しにくい項目はなかったか、評価しやすかったところはどこか等評価項目についての意見、?実習評価と自己評価を比較して思ったことについて調査を実施した。

3.4 倫理的配慮

本研究に協力を得た実習指導者と学生には、研究の主旨を説明し、研究参加は自由意志であり、研究参加への辞退・撤回の自由、データ内容の秘匿性について、また、研究参加の有無などは誰にも報告しないこと等を口頭で説明し了承を得た。

4. 実習指導者への調査結果（目的1）

4.1 個別性に応じた介助の必要性を理解して実施できるかの指導者の意見

実習指導者の意見を表1にまとめた。学生は、受け持ち利用者については、介護計画を進めるために多くの時間を一緒にいることから、受け持ち利用者のことは、良く理解している。しかし、その他の利用者のことについては、あまり理解していないことが多いとの意見があった。一方で、受け持ち利用者のことで一生懸命になり、他の利用者の情報までは理解できなくても、利用者への対応がスムーズであり、どの利用者に対しても丁寧なケアができれば、学生としては十分であることから良い評価を付けるとの意見もあった。

利用者の個別性については、施設では、「利用者個々人にあった」など分かりやすい言い方をしているので、表現を変えた方が良いのではないか、という意見もあった。

表1 個別性に応じた介助の必要性を理解して実施できるかの実習指導者の意見

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・受け持ち利用者の個別性は理解しているが、他の利用者の対応ができていないと個別性が理解できていないと評価している。 ・受け持ち利用者に集中しすぎて、他の利用者のことは見えてないことが多い。 ・利用者を無視せず、顔や目を見てコミュニケーションを取っていれば、個々人（個別性）に対応していると捉えている。 ・利用者とコミュニケーションは取っているが、利用者への対応の中で、学生だからと利用者の頼みを断ったり、何もしようとしなかったりしていれば、個別性への対応ができていないと判断する。自分が分からなかったら、職員に尋ねるなどの行動がとれることが重要である。 ・個別性よりは、個々人にあったとか、一人一人に合わせたと言葉を変えた方が分かりやすい。 ・留学生は、個々人に対応しようとしているができないことが多い。実習指導者は、できないことを、できるところへ持っていくのが役割であるから、ルーブリックはレベルを確認しやすい。 |
|--|

4.2 介護実習を通して、利用者の望む生活が理解できるかの指導者の意見

実習指導者の意見を表2にまとめた。実習Ⅰは10日間、実習Ⅱ・Ⅲは各20日間の実習期間と短いこ

とから、「学生が受け持ち利用者以外の利用者の望む生活を理解するのは困難かもしれない。」「特に認知症の利用者を理解することは難しいと思う。」という意見があった。

表2 介護実習を通して、利用者の望む生活が理解できるかの実習指導者の意見

- ・短い実習期間に受け持ち利用者以外の利用者の望む生活の理解は難しいのではないかと。
- ・認知症の利用者の望む生活は理解しにくい。
- ・認知症の利用者も学生に慣れるのに時間がかかる。

4.3 重度の利用者とは、寝たきりの人なのか、認知症の人なのか、どちらでもよいのかと迷うとの実習指導者の意見

実習指導者の意見を表3にまとめた。重度の利用者のとらえ方は、これまでは実習指導者が評価をする場合に、重度の寝たきりの利用者対応なのか、重度の認知症利用者対応なのかと迷う項目であり、採点しにくいとの意見があった。一方、本調査では、重度の利用者という表現の項目を重度の認知症や重度の寝たきり利用者等、細かく分けてしまわない方が良いとの意見があった。

認知症の利用者や寝たきりの利用者への対応は難しいため、学生がその対応を躊躇したり、対応ができなかった場合は、評価点が悪くなるので、その原因をコメント欄に記載することで学生は理解できるのではないかと、項目をこれ以上増やさないと良いとの意見があった。逆に、重度の認知症とあえて書いた方が、学生が意識しやすいのではないかと意見もあった。

表3 重度の利用者について実習指導者の意見

- ・認知症の方への対応も個別性のところに入ると思うので、あえて認知症と入れなくても良い。
- ・認知症の人や重症の人について対応に問題があれば、コメント欄にどこができないかを詳しく記載すればよいと思うので、あえて書かなくても良い。
- ・認知症とあえて入れた方が、学生の意識には繋がるのではないかと。
- ・認知症の人への対応は難しいので、点数は低くなると思う。

4.4 ルーブリック評価表全体についての実習指導者の意見

実習指導者の意見を表4にまとめた。ルーブリック評価は、これまでの評価方法に比べ評価しやすい上に、実習指導者にとっても学生のできるところと、できないところを明確にできる。その為、できるところは褒めて、できないところを強化することができるので分かりやすいという意見であった。さらに、ルーブリック評価は、実習指導者の経験値からくる評価視点を見える化しており、学生の動きと比較できることから各指導者の評価視点のブレをなくすことに繋がるという意見があった。ルーブリック評価は、あらかじめ可視化されたパフォーマンス課題を基準にして行う評価法である。ルーブリックによるパフォーマンス評価を行う最大のメリットは、評価者と被評価者が課題に対して明確なフィードバックが得られる点でもある。介護実習におけるルーブリック評価は、目標と評価基準が明確であり、評価尺度も決まっていることから、教員は、実習指導者と学生の評価についての意見交換がしやすくなる。教員は、これまで実習指導者に聞けなかった学生の低い評価点の実践状況についても意見を交わすことが容易になる。調査では、ルーブリック評価を介して教員と実習指導者との連携が取りやすくなるという意見も聞かれた。

実習において、学生は日々様々なことを学び成長していくが、ルーブリック導入前の評価表は、1項目の中に複数の評価指標があるため、学生が出来たという評価と出来なかったという評価が混在していることから、出来ていることと、出来ないことが何か、評価表では読み取りにくかった。また、評価の際には、これらを平均化してしまうので、評価点5を取りにくい構造になっている。しかも実習とは関係なく良い印象を与える学生は、実習指導者をはじめ職員の評価が高いため、細かい点は総裁される傾向にあった。しかし、細分化されたルーブリックの項目は、評価視点が1つ、多くても2つであることから、学生が評価点5を取りやすくなっている。ゆえに学生のやる気向上に繋がるとの意見があった。

実習指導者は、実習が始まる前に項目の多いルーブリック評価内容を確認しておくことになる。それが、学生のパフォーマンスに対する視点を養うことになり、評価視点が定まりどのような学生においてもブレの無い評価ができるようになる。ルーブリック評価は、指導者の評価能力の向上にも繋がるとの意見が聞かれた。ただ、学生の成長については、実習期間が短いことと、実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲにおいて学生の成長過程が違うことから、実習Ⅲにおいても評価点5に到達できない項目もあることが語られた。特に、留学生においては、日本語能力の程度により評価が違ってくることがあるとの意見があった。

表4 ルーブリック評価表全体についての実習指導者の意見

- ・つけやすさは、従来の評価表と比較するとルーブリックの方が良い。
- ・項目の表現がわかりやすく書いてあるので特に問題はない。
- ・評価は正確性を求められるので、ルーブリックの方が確実な指導に繋がっている。
- ・項目が多いので、何人かの学生を付けるのは大変であるが、結果を見ると、指導しないといけないところが見えてくるので、ルーブリックの方がより良い指導に繋がる。
- ・評価表をルーブリックにすることは、評価項目が細分化されているので、学生の課題が明確になる。
- ・学生は、どこを努力したらいいかわかりやすいと思う。
- ・あらかじめ評価内容を見ておくことが、評価者の評価視点がわかる。
- ・従来の評価表は、学生の動きを職員の経験値からぼやっと見ていて、評価表に書くときに思い出して記入するような評価の付け方であったが、ルーブリックは、ぼやっと見ていられないので、実習指導者にも学生の見方が定まるので良いと思う。
- ・実習指導者には学生をざっくり見る人もいるが、実習指導者が学生を見る視点が定まるので良い。
- ・実習中の学生の動きに焦点を当ててみるので、観る視点が養われる。
- ・ルーブリック評価の項目は、指導者の学生の動きと評価指標を比較して評価点を付けるので、実習指導者の質の向上に繋がる。
- ・ルーブリック評価表は、苦手なところが見えてくるので1年目の新人職員の評価表にしても十分使える。
- ・施設では、職員の査定にルーブリックを使っていることから、実習評価のルーブリックも特に違和感はない。
- ・ルーブリック項目をあらかじめ見ておかないと評価点を付けられないので、実習指導者の気づきにも良いように思う。
- ・ルーブリックの評価項目は、できる場所は5が付けやすいことから、学生も5が多くなることでやる気が出ると思う。
- ・学生のモチベーションを上げるためには、褒めることが大切であるが、実習指導者がどこを褒めたらよいかルーブリックはわかりやすいので実習指導者にも良いと思う。

4.5 ルーブリック評価が負担であるか否か、従来の評価表と比較してルーブリックを取り入れる利点について

実習指導者の意見を表5にまとめた。初めてルーブリック評価表を見た指導者の感想は、「字数が多い、これ読むの大変そうだ」である。しかし、ルーブリックで評価すると、「学生を見る視点が定まり評価しやすいし、時間もかからない」と意見が変わる。介護福祉コースで使用しているルーブリック評価表には、79項目の評価項目があり、各項目を5段階評価していることから、枚数が10枚となり冊子のようにになっている。10枚の評価表と従来の1枚の評価表を比べて、時間がかかりそうと負担感を持つのは当然のことである。しかし、学生の実習でルーブリック評価を体験すると、評価のしやすさと適切さが分かり、従来の評価表で評価をしていた際には、自分の体験からくる視点が大きかったことに気づくようである。従来の評価のつけ方は、学生の実習終了後、評価表の項目と評価指標（実習ノート）を確認しながら学生の動きを思い出し評価する。この評価作業に時間がかかってしまう。ゆえにルーブリック評価は、評価指標が可視化されていることから、評価項目を確認し、5段階評価のどのレベルにいるのかをつけていだけなので、時間的には負担がないことが理解できるのである。しかも、パフォーマンス評価として可視化されている指標は、これまでに何度も修正をし、実践の動きに近い表現に改良し、実習指導者より動きがわかると評価されている表現になっている。つまり、初めてルーブリックで評価をした実習指導者の意見は、概ね高評価の意見となり、ルーブリックを取り入れたことの良い点を語るのである。

表5 ルーブリック評価が負担であるか否か、従来の評価表と比較してルーブリックを取り入れる利点

- ・初めてルーブリックを見た時、現行の評価表の1枚と比べてしまい、文字数が多いと感じた。しかし、実際評価をしてみると評価しやすいし、時間もかからないことが後で理解できた。
- ・採点后、再度見直す時も、いちいち思い出さなくても項目を見れば確認できるので、時間短縮にもなる。
- ・現行の評価票は、実習ノートの評価指標を見ながら学生の動きを思い出してつけるので、評価に時間がかかるし悩むことが多い。
- ・見た目が多い（文字と枚数）ので、大変そうに見えるだけである。
- ・これまでの評価表は何点につけるか悩んでいる時間が長いので時間がかかった。
- ・ルーブリックは、細かく書かれているのでつけやすい。

4.6 実習評価としてルーブリック評価表を導入するための課題

実習指導者の意見を表6にまとめた。実習指導者の意見からの課題は、実習生が多いと名前と人物が一致していないので間違えて付けてしまうことがある。また、コメントを書く量が多いので字を間違えるときがある。パソコン入力ができれば間違えても修正できるので、できればパソコン入力できるようにしてほしいとの要望があった。また、各評価項目数の差異があるために平均点が出せないことも実習指導者からの意見としてあった。

表6 実習評価としてルーブリック評価表を導入するための課題

- ・評価表に記載するコメントが手書きの記入なので、字を間違えることもあるので困る。できればパソコン入力できると良い。
- ・学生が多いとかぶることがあるので、誰のかわかりにくくなる。
- ・はじめはコメント欄にすべてコメントを書かなければならないと思っていたが、必要なところだけで良いとわかり楽になった。
- ・パソコン入力になれば、コメント欄が多くても手間がかからない。

・ルーブリックの各評価項目数が違うために平均点が出せない。

5. ルーブリックでの実習評価と自己評価について学生へのインタビュー調査結果

5.1 ルーブリック評価項目の表現の妥当性についての意見

学生の意見を表7にまとめた。実習Iで、初めてルーブリック評価表で自己評価を実施した学生に、自己評価の際に、わかりにくい表現や評価しにくい項目はなかったか、評価しやすかったところはどこか等評価項目についての意見を聞き取った。学生の意見から、自己評価を付ける際に、普段の癖や考え方が出てきてしまうことも明らかにされた。例えば、専門家として利用者の名前や顔を覚えることは重要であるが、マナーとして利用者の年齢など聞いてはいけないと思って聞けなかったなど、臆から気遣いをしてしまっていることもあり、評価項目の表現に戸惑いがあることが明らかになった。さらに、「利用者の反応を待ってから適切な介護ができる」の項目では、反応を待った結果、利用者の言葉に対してどうしたらいいのか分からなかったので黙ってしまい何もできなかった。つまり利用者の反応に対し、自分は適切な介護をしなかったと学生は判断した。しかし、自己評価の際には、利用者の反応を待ったことに着目し、評価点は5につけたとの意見があった。

初めての实習では、コミュニケーション能力も低く、反応の仕方も分からない状況で、介護技術やコミュニケーションなど評価レベルの高い項目に対しては評価点の付け方に戸惑いがあることも明らかになった。

表7 自己評価項目の表現の妥当性についての意見

- ・ルーブリックの項目から、実習で何をすべきか理解しやすかった。
- ・実習前に読んでおくことで、目指すべき目標をイメージしやすかった。
- ・10日間という短い期間であるため、目標に達することができない項目がある。
- ・評価表に表れている評価点が、1・3・5であるが、学生は、1・3・5の間に2・4がある事を説明されていたので、自己評価で4を付けることもあったが、施設からの評価では、3か5でしかついていなかったの、実習指導者は分からないのではないかと思った。
- ・実習施設がデイサービスで、共有スペースでの実習であったので、居室がなかった。居室に入るときはノックをするの項目は評価しにくかった。
- ・利用者の年齢を聞いたらいけないのかと思って聞けなかった。利用者の年齢が分かるの項目は、年齢が分からなかったので評価できなかった。
- ・初めての実習であったので、介護技術については高得点を取ることができないので、きついなと思った。

5.2 実習評価と自己評価を比較して思ったことについての意見

学生の意見を表8にまとめた。今回の調査では、学生が、利用者とコミュニケーションを取る際に関する意見が出された。例えば、「利用者の話を傾聴できる」、「いろいろな利用者と話す機会を自ら作ることができる」などの項目で、コミュニケーションを苦手とする学生が、特定の利用者とはしか話してなくて、もっと色々な利用者と話さなければと思っていて実習中はできなかった。しかし、実習評価では、職員は利用者とコミュニケーションが取れると思ったのか高評価点を付けていること等、「自分が思っていた以上に、自分が出来ていたと思うところ、施設ができていると思っているところの差が大きかった」と、評価の違いに戸惑いがある事を報告している。つまり、学生が「話を聞く」というレ

ベルと職員が考える「話を聞く」というレベルに違いがあると実習評価と自己評価に差が出てしまうことが明らかになった。

また、自己評価より実習評価の方が低かった学生の意見では、自分自身は、普段から自分のことを良くとらえ評価してしまう傾向があり、わからなくなると良い方向で考える癖があるので、自己評価を付ける際も迷った時は、良い点を付けたとの報告から、学生の性格傾向が評価に関係していることも明らかになった。評価点の悪い項目は、指導者からのコメントを見て評価点には納得できたと、報告している。さらに、「施設理解」について、自分は施設を理解していると思い自己評価は5にしたが、実習評価は、3であった。これは、なぜなのか分からないとの意見もあった。逆に、自己評価より実習評価の方が高かった学生の意見では、普段から自分に自信が無いので、自分で「出来ている」と思っても評価点は低くつけてしまうとの意見があった。

表8 施設評価と自己評価を比較して思ったことについての意見

- ・ 利用者の話をかなり傾聴できていたと思っていたが、指導者には必要最小限ととらえられたのか実習評価点は3であった。
- ・ 特定の利用者と話していて、様々な利用者と話していなかったと思っていたので、3をつけたけど、実習評価点は5がついてきて驚いた。
- ・ 「利用者の反応を待ってから適切な介護ができる」は、反応を待っていたら、「利用者が私バカやからわからん」と言ってきたが、どうしたらいいかわからなかったけど、自己評価点は5につけた。それは、利用者の反応を待ったから出来ていると思った。施設評価点は、3であった。
- ・ 施設の理解は良くできたと思ったので自己評価は5を付けたが、実習評価は3がついてきた。なぜ3なのか評価点の根拠が分かりにくい。
- ・ 実習評価の方が自己評価より低かったので、次回頑張ろうと思った。
- ・ 職員との意思疎通では、自分の考えをかなり伝えていたと思っていたが、職員には何がしたいのか伝わっていなかったようで、評価点は低かった。
- ・ ある程度出来ていても自分に自信が無いので、いつも自己評価は全体的に低くつけてしまうことが多い。実習でも自己評価より実習評価の方が高かった。

6. 結果・考察

本稿では、これまでのルーブリック評価の調査から、学生の自己評価と実習指導者の評価に逆相関のあった項目を基に、実習指導者と学生にインタビュー調査をした。結果、指導者からは、初めてルーブリックで評価したが、思っていたより評価しやすかったとの意見があった。ルーブリックでの評価は、学生の実習前に各評価項目を見ておくことで、評価視点が定まり、どの学生にも同じ視点で評価することができることから、経験の違う実習指導者にとっても使いやすいとのことである。実習評価の評価視点の可視化は、実習指導者の評価能力の向上に繋がるとの意見も聞かれ、ルーブリック導入の良い効果が立証できた。評価項目については、分かりやすく問題ないが、利用者の個別性より「個々人の」と平易な言い方の方が良いとの指摘もあり、評価項目の表現をより分かりやすい表現に変えていくことも継続していく必要性を感じた。

初めて実習に臨んだ学生の意見でも、評価項目が分かりやすく、実習で目指すべきところがどこか分かったのが、それに沿って実習できたとの意見が聞かれた。学生にとっても実習目標や各項目のパフォーマンスの可視化は実習の動きのイメージがつかみやすいことが証明された。一方、学生の評価項目に対

する評価の視点として、自分自身に自信がない場合、ある程度出来ていても低い点を付けてしまうなど、自分に対する自己肯定感などが影響してくることも明らかにされた。加えて、「女性に年齢を聞いては失礼になる」など、家庭での躾や自分の持っている知識から、人に対するマナーと専門家として求められているパフォーマンスの異差が評価に関係してくることも明らかになった。また、これまで高等教育研究会で評価項目としての是非が課題となっていた施設理解について、学生からも評価点の根拠が分かりにくいとの意見があった。新カリキュラムにおいては、実習施設の理解が求められていることから、今後の課題として根拠をより分かりやすくする工夫が必要であることが確認できた。実習におけるルーブリック評価の目的は、毎回の実習から評価内容を振り返り、学生の学びの向上に繋がる汎用性のある評価とすることである。今後も、現状に即し、常に項目の表現を精査して評価としての妥当性を追求していくことが重要である。

7. まとめ

2016年から高等教育研究会で検証してきたルーブリックは、実習指導者や学生からの調査により、ルーブリック指標項目の表現を学生の動きとリンクするように表現を変えてきた。今回の調査においても、実習指導者や学生からは、表現については「わかりやすく理解しやすい」との意見が聞かれた。高田短期大学の介護実習においては、ルーブリック評価が定着し、実習施設の指導者からは高い評価を得ている。

さて、三重県には、当校だけでなくいくつもの介護福祉士を養成する教育機関があり、三重県介護福祉士養成施設協議会（以下、養成校）を形作っており、当校もその会員である。各養成校は、実習を受け入れる施設と連携を図って学生の教育に取り組んでいる。そこで、各養成校においてもルーブリック評価を取り入れ運用していくことによって、実習を通じた学生の育成に大きな効果がもたらされると考える。

ただし、ルーブリックの課題は、活動の課題と運用の課題があると言われているように、ルーブリック評価を活用していくには、学生の理解度や実習の特性に即してルーブリックの各項目の妥当性や整合性を再検討し、より適切な表現を模索する必要がある⁹。また、ルーブリックの運用については、ルーブリックを効果的に活用するための指針や方法を教員間で十分に検討する必要がある。

現在のところ各養成校の教員間でルーブリックの項目について十分な協議をしていないのが現状である。今後、実習評価としてルーブリックを採用するためには、教員間でルーブリックの項目について協議して、各養成校の実習形態に合わせた評価内容にしていくことが必要である。さらに、学生の自己評価についても、実践のステップアップにどのように繋げていくか、効果的な実践に結び付けるために個々の学生への指導方法なども検討していく必要がある。本校での開発、実践、改良の経験を参考に、各校に即したルーブリックの開発と活用の機運が起こることを期待しつつ筆を置く。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、高田短期大学高等教育研究会のメンバーの方々には多大なる支援をいた

いただきました。記して感謝申し上げます。

本研究は、JSPS 科研費 JP19K02261 の助成を受けたものである。

引用文献

1. 社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会（2017）「介護人材に求められる機能の明確化とキャリアパスの実現に向けて」厚生労働省
2. ダネル・スティーブンス+アントニオ・レビ、佐藤浩章監訳+井上敏憲、俣野秀典（2014年）「大学教員のためのルーブリック評価入門」玉川大学出版部
3. 公益法人日本介護福祉士会（2019）「介護実習指導のためのガイドライン」平成30年度生活困窮者生活困窮者就労準備支援事業費等補助金社会福祉推進事業介護福祉士の養成カリキュラム改正を見据えた介護実習科目の実習指導体制のあり方に関する調査研究事業
4. 沖裕貴（2012）「大学におけるルーブリック評価導入の実際 — 公平で客観的かつ厳格な成績評価を目指して —」立命館高等教育研究 14号 pp71-90
5. 福田洋子、野呂健一、寶來敬章、鷺尾敦（2018）「介護実習評価ルーブリックの開発」高田短期大学キャリア研究センター紀要・年報第4号 pp35-46
6. 遠海友紀、岸磨貴子、久保田健一（2012）「初年次教育における自立的な学習を促すルーブリックの活用」日本教育工学会論文誌、36（suppl.） pp209-212
7. 福田洋子、野呂健一、寶來敬章、鷺尾敦（2019）「介護実習でのルーブリック評価の導入による効果と課題」高田短期大学キャリア研究センター紀要・年報第5号 pp28-39
8. 福田洋子、鷺尾敦、野呂健一、寶來敬章（2021）「介護実習の質の向上を目指したルーブリック改善の取り組みと課題」キャリア研究センター紀要・年報第7号 pp28-39
9. 貝谷敏子、菅原美樹、川村三希子、神島滋子、藤井瑞恵、工藤京子、柏倉大作、村松真澄、小田和美、中村恵子（2017）「看護演習科目へのルーブリック導入の効果・ルーブリック評価の信頼性と妥当性の検討」札幌市立大学研究論文集 11巻1号 pp3-11